

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520295

研究課題名(和文)

西洋古典文学における「創造的模倣」の実証的解明を基礎とする作品論研究

研究課題名(英文)

Studies on the Classical Literary Works based on the Positive Elucidation of the "Creative imitation"

研究代表者 大芝 芳弘 (OSHIBA YOSHIHIRO)

首都大学東京・大学院人文科学研究科・教授

研究者番号：70185247

研究成果の概要(和文)：

本研究は古代人自身が「模倣と競争」と呼び、現代では「創造的模倣」と呼ばれる文学創作の原理が、西洋古典文学作品において具体的にどのように実践されているかを個別作品の緻密な読解と考察を通じて解明することを目的とする。両研究者は個別に選定した作品に関して形式的・文体的側面と内容的・題材的側面の両面にわたって実証的に検討を重ねることにより、複数の作者と作品に関してその文学的伝統と革新の問題に一定の光を当てることができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：

Our Research-project aimed at investigating various works of Greek and Latin literature from the point of view of literary tradition and innovation with the help of ancient literary theory of '*imitatio et aemulatio*', which is now called 'creative imitation'. We tried to elucidate how this principle was put into practice in various works by investigating as carefully as possible not only their formal or stylistic features but also their thematic characteristics. Through these investigations on individual works we could find even more clearly that the very creativity of each work consists in its unique relationship with the tradition. Thus we think that by applying the ancient literary principle of 'creative imitation' to the critical analyses of classical literary texts we could shed some light on the problem of tradition and innovation in ancient literature.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：西洋古典学

1. 研究開始当初の背景

本研究組織を構成する両名の研究者、研究代表者の大芝と分担者の佐野は、2005年度まで東京都立大学の西洋古典学分野の専任教員としての同僚であり、都立大学が首都大学東京に改変された2006年度以降も佐野が首都大学の西洋古典学演習の非常勤講師として出講するなど、本学の西洋古典学研究と教育をともに担って来た。両名は都立大学時代から科学研究費補助金による研究をずっと継続して遂行して来たが、それらは基本的に西洋古典文学における伝統と革新、模倣と独創の問題を主たる課題としたものであった。即ち、古典文学作品を形式と内容の両面にわたる様々な角度から実証的に検討・考察することにより、西洋古典文学における伝統の根強さと、同時にしかし個々の作品がその伝統に対して多様な工夫を凝らして新たな作品を作り出してゆく革新性と創造性の機微を捉えることに努めて来た。この問題は同時に西洋における古典文学研究においても盛んに議論され研究が積み重ねられている問題であり、本研究組織も直前の課題「西洋古典文学における間テキスト解釈理論に基づく実証的作品論研究」（基盤研究（C）、平成17・18・19（2005-2007）年度）では、現代の文学理論の一つである「間テキスト解釈理論」を応用する試みを行った。本研究はこの成果の上に立ち、改めて古代人自身の創作理念に即した検討を志したものである。即ち、間テキスト解釈理論はある意味で古代人が「創造的模倣」と捉えた原理の現代における理論化の側面を持つものであり、従って、古代人自身が彼らの修辞学理論や文学論の観点から文学創作上の原理を「創造的模倣」として把握したのであれば、その原理の実践の様相を具体的な作品に即して解明することは西洋古典文学を古代的な視点から理解することに他ならないと考えられるからである。そしてそれは、現代の解釈理論による検討を補完するとともに、これまで本研究組織が押し進めてきた一連の作品論研究をさらにいっそう発展・深化させる方法の一つであると確信された。従って、本研究課題は従来の本研究組織の研究をさらに継続して進展させてゆくものであると同時に、西洋における西洋古典文学研究の動向に即しつつも独自の観点に立って西洋古典文学における創造性の問題を個別の作品に即して実証的に解明してゆく課題として設定された。

2. 研究の目的

西洋古典文学においては、先行する作品を意識的に模倣しつつ同時にそこに新たな創意工夫を加えることで独自の作品を生み出すということが創作の基本的な方法であった。ローマ人が「模倣と競争 (*imitatio et aemulatio*)」と言い、今日しばしば「創造的模倣 (*creative imitation*)」と呼ばれるこの方法こそは、西洋古典文学全体を一貫する創作の原理だったと言える。従って、古典文学作品を正しく理解するためには、ある作品がいかなる先行作品を模倣しつつそこに新たな工夫を凝らしているか、作品相互の影響関係と創意工夫の様相を個別の作品に即して叙述内容と文体など形式面との両面にわたって検討することが重要になる。このように、「創造的模倣」の原理に着目し、具体的な個々の作品においてその原理がいかに応用・実践されているかを実証的に解明することにより、各々の作品の特色と独創性を明らかにし、文学的伝統と革新の問題に新たな光を当てることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

まずは本研究に関連する先行諸研究の調査と概観、ならびに「創造的模倣」など文学創作の手法や原理に関わる古代修辞学および文芸論上の諸著作の概観を継続して行い、併せて現代の文芸理論との関連についても確認する。また模倣と独創の様相が最も顕著に現れる修辞技法と文体論的諸特徴に関しても検討する。次いで「創造的模倣」の実例として検討すべき作品の選定を行う。対象作品が確定したならば、文献学的基礎作業に立脚しつつ、当該テキストに関する可能な限り綿密・着実な読解を行い、形式と内容の両面にわたる多様な観点からの観察と分析を進める。具体的な作業としては、各種校訂本・注釈書・翻訳書などを参考にするのはもちろんであるが、データベースを活用しての用語検索を含め、各種文法書ならびに辞典類を参照し、原文の異読や欄外注の確認など文献学的にも厳密な読解に努める。その過程で、当該テキストと関連する類似箇所、並行例、そしてまさに「典拠」となる箇所などが見出されたならば、それらの関連箇所についても同様の読解作業を進める。その際には、部分的関連の確認に留まらず、関連箇所を含む作品全体との比較検討を行うことで、当該作品が先例となる作品からどのような要素を模倣し、また先例とは異なる新たな工夫をどのように凝らしているかを考察する。これらの作業は研究代表者と分担者が各自の関心に応じて進めるが、随時相互の研究の成果を連絡し合い、最終的な成果となる論文を執筆する。

4. 研究成果

本研究の目的に即して、古代的創作原理としての「創造的模倣」の観点から具体的な古典文学作品の原典を綿密に読解し、当該作品とその先例となる作品との間に、あるいは、当該作品とそれを先例として作られた作品との間に、どのような「模倣と創造」の関係が見出されるかを、形式的・文体的側面と内容的・題材的側面の両面にわたって検討・考察する作業を継続して行って来た。その成果として、この3年間の間に下記の「5. 主な発表論文等」に記したように、様々な古典文学作品を対象とした論考を公にすることができた。主なものを回顧すれば、佐野は従来から主たる研究対象として来たホメロス叙事詩の叙述技法の一つとしての範例的場面と物語の主題との関連やそれに付随する諸問題を論じた論考と、プラトン『国家』の正義論やアリストテレス『詩学』の叙事詩論を扱った論文を執筆した。大芝はカトゥッルス of テクストの読みの問題とホラティウスの『カルミナ』の一作品に関して先行する様々なジャンルの作品からの影響をも考慮した解釈を提示した論考のほか、プラトン『国家』がキケロー『国家論』に及ぼした影響とキケローの主張の独自性を指摘する論考を公にした。本研究の課題に対して、それなりの成果を出すことができたものと自己評価できるのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

1. 佐野好則 「『イーリアス』第11巻におけるネストールの物語」 『西洋古典学研究』 59 (2011), pp. 1-11. 査読あり
2. 佐野好則 「ホメロス叙事詩における運命表現」 『人間に固有なものとは何か — 人文科学をめぐる連続講義 一』 (創文社、2011)、pp. 261-284. 査読なし
3. 佐野好則 「『ポリテイア』第4巻における正義の定義の背景」 『理想』 686 (2011), pp. 14-23. 査読なし
4. 大芝芳弘 「キケロー『国家論』へのプラトン『国家』の影響 — 「洞窟の比喻」との関連を中心に 一」 『理想』 686 (2011), pp. 83-99. 査読なし

5. 佐野好則 「アリストテレス『詩学』における叙事詩論 — 特に *muthos* と *epeisodion* をめぐって 一」 『ギリシャ哲学セミナー論集』 7 (2010), pp. 1-16

(http://www.soc.nii.ac.jp/gps/Ronshu/2010_1.pdf). 査読なし

6. 佐野好則 「冥界のヘーラクレス — ミーノス〜ヘーラクレス場面 (Od. 11. 565-627) に関する一考察 一」 大芝芳弘・小池登 (編) 『西洋古典学の明日へ — 逸身喜一郎教授退職記念論文集』 (知泉書館、2010) pp. 31-50. 査読なし
7. 大芝芳弘 「*O fons Bandusiae* — Horatius, *Carm.* 3.13 一」 大芝芳弘・小池登 (編) 『西洋古典学の明日へ — 逸身喜一郎教授退職記念論文集』 (知泉書館、2010)、pp. 131-150. 査読なし

8. 大芝芳弘 「カトゥッルスの難読箇所について (2) — Catull. 107. 7-8 一」 『フィロロギカ』 3 (2008), pp. 1 - 23. 査読あり

[学会発表] (計6件)

1. 佐野好則 'Representation of Persian Empire by Greek Authors', Symposium on Socio-economic Structures of Judah and Its Neighbors in the Persian Period (於国際基督教大学)、2011年2月18日
2. 佐野好則 'An Aspect of the Originality of Plato's Concept of Justice in the Republic : the Critical Use of Poetical Ideas in the Tripartite Theory', 国際プラトン学会第9回シンポジウム (於慶応義塾大学)、2010年8月3日
3. 佐野好則 「『イーリアス』第11巻におけるネストールの物語」、日本西洋古典学会第61回大会 (於山口大学)、2010年6月6日

4. 佐野好則「Nekyia におけるミーノース —
ヘーラクレス場面 (Od. 11. 565-627) をめ
ぐる問題について —」、第8回古典文献学研
究会(フィロロギカ)研究集会(於東京大学)、
2009年10月17日

5. 佐野好則「アリストテレス『詩学』におけ
る叙事詩論」、ギリシャ哲学セミナー第13
回共同研究セミナー(於京都大学)、2009
年9月12日

6. 大芝芳弘「キケローの国家論の独自性につ
いて」、科研費「ギリシア政治哲学の総括的
研究」(代表者加藤信朗)第2回研究集会報
告(於首都大学東京)、2008年9月28日

[図書](計1件)

1. 大芝芳弘・小池登(編)『西洋古典学の明
日へ — 逸身喜一郎教授退職記念論文集』
(知泉書館、2010) Pp. xii+415.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大芝 芳弘 (OSHIBA YOSHIHIRO)
首都大学東京・大学院人文科学研究科・教授
研究者番号：70185247

(2) 研究分担者

佐野 好則 (SANO YOSHINORI)
国際基督教大学・教養学部・上級准教授
研究者番号：50295458